

1 日 時 平成23年10月3日（月）午後2時～4時

2 場 所 府中市生涯学習センター 1階会議室

3 出席者（敬称略）

（1）委員13名

川内 清文、小林 清次郎、坂本 智子、設楽 厚子、芝 喜久子、
鈴木 映子、田野倉 晴美、寺谷 弘壬、戸島 忠彦、平形 芳郎、
比留間 一磨、三宅 昭、山内 啓司

※小林（繁）委員、澤井委員は欠席。

（2）職員3名

茂木生涯学習スポーツ課生涯学習推進担当副主幹、
市ノ川企画係長、大木

4 連絡・報告事項

（1）配布資料の確認

（2）前回議事録の確認

（3）第5ブロック研修会 出欠確認について

10月22日【参加者】芝、川内、坂本、設楽、鈴木、戸島、平形、山内

（4）第42回関東甲信越静社会教育研究大会（茨城大会）について

11月18日【参加者】鈴木、山内

（5）第49回東京都公民館研究大会について

12月11日【参加者】芝、設楽、三宅、山内

（6）第53回全国社会教育研究大会（京都大会）の報告

9月20日～22日【参加者】芝、鈴木

■ 研究主題は、「社会的親」の創出による「公共力」の醸成～見て見ぬふりする社会から、おせっかいな社会～ということで、府中市生涯学習審議会が昨年、「おせっかい精神の再発見」をタイトルに答申を出していたので、府中は先行していると思った。

（大会趣旨について抜粋）「近所の大人に叱られたことのない子が8割、近所の大人と一緒に遊んでもらった経験のある子が2割という調査結果があります。このような状況に至った原因の一つは、自分の子どものことしか考えられない自己中心的な「私的親」や、地域の子どもの無関心な大人が増えたことにあるのではないのでしょうか。

一方、“よその子を自分の子どもとして”叱ったり、遊んだりすることのできる

地域の大人を「社会的親」と呼んでいます。この社会的親の不在が、子どもをめぐる様々な問題の一因となっていると考えられます。

この社会的親のように、地域の子どものために、あるいは社会のために自分を活かしていこうとする力を「公共力」と考えています。地域社会の教育力が低下していると言われる現代にあっては、公共力をもった社会的親を育てていくことが、社会教育の緊急課題ではないかと思えます。

また、本年3月11日の東日本大震災により日本社会は未曾有の被害を受けました。しかし、震災後の人々の行動に、今回の研究主題として掲げた「見て見ぬふりする社会から、おせっかいな社会へ」の実現を確信したところです。震災地の復興に向けた取組を目の当たりにして、まさにこれからの日本の地域社会をつくっていく上で、われわれ社会教育にかかわる者が何をしていくべきなのかを熟考していかなければならないと思えます。

そこで、本研究大会は、全国各地の社会教育委員をはじめとする社会教育関係者が一堂に会し、これからの日本社会をつくっていく上で、地域の社会的親を育て、公共力を醸成するために、われわれ社会教育にかかわる者が、何ができるのかを研究協議することを趣旨とします。」

基調講演は「度重なる震災からわたしたちが学ぶべきこと」を演題に、大阪大学総長で哲学者である鷲田清一氏が講師をされた。色々と哲学的なことも含め、話していただいた。特に印象に残ったことは、「文明が進めば進むほど、災害は大きくなる」、「文明が進めば進むほど、人々は無能力になってきている」。便利な世の中になり、自分では何もできなくなり、原始生活以下に人々は落とされていくのではないかと感じると話されていた。

今まで当たり前前（あたり）のことが危険に繋がっていく怖さも伝えていた。やはり、東京は災害があった時、特に危険な街だということ、例えば高速道路が民家の上に作られている。それが、私たち住んでいる者にとっては、当たり前前（あたり）のことに思えるが、災害が起きた時にどうなるのか。ライフラインが止まると、水も飲めない街ではないか等、今まで当たり前前（あたり）と思っていたことが出来なくなるのではないか。

それは、3月の震災で原発事故が起こってから、色々な問題が起こっているが、それを見ながら考えさせられた。そして、私たちは都合の良いことだけを見て、他は見て見ぬふりをして、今まで来たのではないか。そして、文明が進めば進むほど人間が弱くなり、無力になる生き物になるのではないか。生き物である限り、やらなければならない営みがあるはずで、昔は自分たちの手でやってきていたが、だんだんと消えていっているのではと心配されていた。

今、やらなければならないことを国や市が担当してしまっているのではないか。社会が安心、安全の街になって、逆に人々は公共的なサービスにクレームをつけるだけの人が増えてきているのではないか。現在は、付き合いでも気を使わず、本当に幸せな社会ではあるけれど、どこかで閉ざされている社会ではないのかと話をされた。

昔の人は見ないふりして見ていた。新しい公共として、もう一度その血縁の世界を創造したい。市民力が無能力になってはいけない。市民はサービスのクライアントとしては成熟していた。これからは受身ではない市民として成熟していかなければいけない。公共的な事柄で、リーダーとして求められるのは統率力ではなく、全体をケアする視点を持っていることが求められている。リーダーシップではなく、フォロアシップの大切さを訴えられていた。その対極線で侵害を受けとめられる人になれば、その人が本当に必要なリーダーではないかとも話をされた。

それを受けてシンポジウムが行われ、シンポジストは内藤正明氏（京都大学名誉教授）、宮本勝浩氏（関西大学大学院教授）、宮嶋泰子氏（テレビ朝日アナウンサー）はスポーツ活動から出ていた。人間の家畜化という言葉を使っていた。近代化の中で人間の能力がなくなってきているのではないかということ話を話していた。菅原敏元氏（宮城県社会教育委員連絡協議会会長）は、復興ボランティアとして南三陸町へ物資を届けに行ったとき、被災者の方から「今日は何を貰えるのですか。」とさりげなく言われ、目標がなくなった時、生きる力がなくなるのではないかということ話を話していた。

そして、コーディネーターの杉本厚夫氏（京都府社会教育委員連絡協議会会長・関西大学教授）は最後のまとめとして、震災後に社会教育としてできることは、心の復興をするために癒す、コミュニティを復興するためには創る、教育文化を再生するためには伝える、風評風化を防ぐためには繋ぐ、ボランティア文化を定着させるためには支える、この癒す・創る・伝える・繋ぐ・支える5つを大切にしていこうという話しで締めくくった。

- 「親を育てる」というテーマは、研究討議の視点として「子育てを通して親同士が繋ごう」「親同士が繋がりと学びを深めるにはどうしたら良いか」「親以外の大人の子育てに関わることでできる地域コミュニティを育てるにはどうしたら良いか」。最初の事例として、青森県弘前市の非営利法人「弘前こどもコミュニティピープル」の、「子育てママ リフレッシュ広場」という事業。地域の大人たちのための託児付き市民の広場、子育て中の親同士が物づくり、会話をすることによりリフレッシュできる。同時に、講師はスキルを活用したいという身近な人に依頼す

るという、「学び返し」のようなものだが、これが良いと思った。

子育てのチャレンジ事業ということで、子育て中の女性を市民活動や社会参加に繋げるための実践型講座になっている。テーブルトーク、ワークショップを取り入れ、中央で活躍する方々を講師に招く一方で、地域の身近に感じられる人を多数迎え、多様なロールモデルに触れ、自分の生き方、子育てを考えるきっかけを見出す。自発的に発言、参加することにより、自己肯定感を持つことは、育児をする力に向かっていく。子育て中の父親を対象とした連続講座「パパカレッジ」では、父親が抵抗感なく参加できるよう、受付に男性スタッフを置くなど、雰囲気作りにも心がける委員会を設け、託児付きで、男性が育児マインドを身に付け、家庭や地域にコミットする自己成長する講座を設ける。今後の課題としては、将来の社会の担い手である若い世代への支援にも取り組むということだった。ここでは、それまで県の事業でも託児つきというのではなく、ここで初めて託児つきというのを始めた。

事例2として、スポーツをする子を通して親も育つということで、山口県のサッカースポーツ少年団を26年監督していた佐藤氏の発表だった。サッカー少年団には様々な子が入団してくる。サッカー好きの子、友だちに誘われて入ってくる子、家で退屈しているからなど動機は様々だが、どんな子にも居場所ができるようにと役割を持たせることに留意し、子供の良いところが活かせるようなチーム作りをした。その後、サッカー通信を発行し、各家庭に配布した。10年ほど前から、自分の子どもしか見ない親がだんだん増えてきているが、通信の中であまり上手でない子を褒めたりするうちに親が反応し始め、サッカーを通じて親と交流、感じたことを親が書き込みをしたり、また、感じたことを書くことによって親同士の団結ができてきた。そして色々な事業に協力してくれるようになった。スポーツ少年団の活動を通し、親を育てる。親は団員を地域の子ども、自分の子どもとして応援し、地域活動に広まっていった。これが、親が育った姿だと感じたと話していた。様々な体験を通し、親に語り、通信で伝え、親も育っていったという話だった。

事例3として、親を学ぶ、親を伝える、明日の親のための講座ということで、大阪市の教育委員会の伴野氏の話だった。様々な集まりやグループで、親と子の関係や子育てについて学び合うための講座で、「親を学ぶ、親を伝える」という教材を開発された。これはワークショップ形式で、学習参加する人それぞれが経験や考えなど資源を持ち寄り、話し合いを進める中からお互いの理解や気持ちを生み、一人一人をエンパワメントとすることを目標としている。学習リーダー養成講座を3年間実施し、300人以上が受講した。現在、受講した方の修了者を対象に、定期的なフォローアップ研修を続けている。実践的な取り組みとしては、幼児教育支援センターで親学習教材を活用した講座をしている。高等学校では親学習教材で授業を

している。豊中市の家庭教育協議会を設置し、子育て講座や家庭での教育に関わる相談、世代間交流に取り組んでいる。「たまごのワークショップ」では、親学習教材の中にあるプログラムを活用したワークショップで、当初、中高生が対象だったが、今では小学2～6年生の授業、PTA、企業、大人にも実施している。また幅広く、他市の小学生やPTAにも講座を行っている。このワークショップの内容としては、赤ちゃんについてのイメージを出し合うというもので、一人一人に生卵を渡し、それをひとつの命と見立てて、子育てを疑似体験する中で、命の大切さや親になる気持ちを考え、みんなで発表し合うというもの。卵に顔を書いて、1分間集中して大切に手の中で暖める。卵をひとつの命として認識し大事にする。どうしても自分が生活の中で外出しなければならない時には、お隣に子どもを託したりするが、その卵を隣の方に預かってもらうなど、赤ちゃんを大事にしていくということで、赤ちゃん、友だち、家族などと接する時、大切なものは何かという思いを出し合うというもので、とても良い授業だと思った。

- 「人と人を結ぶ地域活動」というテーマで、今回おもしろいと思ったのは、ポスターセッションというものを設けており、大きな会場の中で質問できない方もいるだろうということで、色々な区分けで催し物や展示がある一つの部屋で、わからないことを聞いていくというものだった。木津川市の方で、ここがおやじの居場所ということで「男子厨房に入ろう会」という会を作っている方がいた。その会は公民館講座のお父さんの料理教室から16～7名でグループを作って、その方たちが1年の計画を立てながら、料理を勉強したり、自主活動を開始した。また、ボランティア精神に目覚めたのが、市のイベントにやきそば屋をはじめとした店を出した。それをやって喜ばれたことで、ボランティア意識が強くなって、自分たちの町の福祉協議会がやっているイベント、市のお祭等、色々な所にお店を出させてもらい、町の人たちと楽しんでいるということだった。その周囲の人たちに喜んでもらえることが生きがいとを感じるようになったと話してくださった。

それから、豊中市上野公民分館といって公民館ではなく、小学校区に一つずつある41の分館だそうで、おそらく学校の敷地内にあるものだと思うが、市職の方たちは全く入らず無償ボランティアで運営している。部屋は貸し館と言っていたが、部屋の管理等を町の人がやっている。そのやっている人たちは社会教育委員で分館長として活躍していた。分館という特殊なものを持っている地域だからこそ出来るのかもしれないが、実践で動いていると感じた。

宇治市精華町の社会教育委員は、教育委員など色々なものを取り入れて、聖歌町こども祭というイベントをここ何年かで始めた。ここでも社会教育委員の方が実践

活動していた。八幡市社会教育委員の方が、団塊の世代のための地域デビュー相談を始めた。2010年からなので、まだ日は浅いが、これも無償でやっているということだった。社会教育委員は、生涯学習センターの一部屋を借りて、月1回交代で常駐する。すると色々な相談が来る。かなりそこから地域にデビューしていく団塊の世代の方がいる。市の広報紙、京都新聞、生涯学習だよりも活動内容を掲載すると、相談に来る人がいる。どこの町も社会教育委員が会議だけでなく動き出していると感じた。分科会も人と人を結ぶ地域活動ということで、分館の方の詳しい話、八幡市の社会教育委員の話聞いて、今は実践しなければならない社会教育なのだと感じた。

- 宮本勝弘氏は経済学者だが、どんな話をしたのか。
- 今回の東日本大震災の被害額というのは、原発被害を除いて16～25兆円（阪神大震災は14兆円）だったという話で、地域の活性化を伝える大切なものは、お金でも機械設備でもなく、人が大切だということをやっていた。立派な人を育てるのは教育であり、教育とは単に知識技術を教えるのではなく、人としての道を教えることが大切。立派な人たちの協力が素晴らしい社会を創る。一般教育とは心の教育だと話していた。子どもの教育には、親、大人の教育が必要である。暴力行為をするような子どもたちが入所している児童自立支援施設では、その方の親は暴力行為に走っている場合があるとか、ゴミを道に捨てる子どもに困っていると、大人が道にタバコを捨てているなど、大人が子どもにそういう行為を見せているのではないかと話していた。子どもの教育をする前に親の教育が必要。社会教育は大人だけのものではなく、学校や家庭教育まで全てが社会教育である。社会教育の中におせっかいという言葉が出てくるが、おせっかいの社会で見ても見ぬふりをしては何も作り出せない。おせっかいをする社会が素晴らしい社会を創りあげると話していた。
- 経験者がお互いに刺激し合って、良いものを作っていくということが、この大会の一種の目的だと思うが、少し地域の経済の活性化にも繋がると良いと思う。例えば、テレビで府中を宣伝するならば、けやき並木は心が安らぐので通って頂きたい等となるが、横須賀は自衛隊の知恵を借りて、若者にも来てもらえるようカレーとカレーパンを売っている。昔、海軍は金曜日になると船や潜水艦では曜日が分からなくなるので、金曜日にカレーを出していた。それで、カレーパンを出しているが、けやき並木の心の安らぎというよりも、カレーパンのような食べ物のほうが、人々を引っ張っていくような気がする。地域密着している人たちが総論をきいて各論をきいてシュミレーションして頂くことがこういう題材の重要な役割だと思っている。
- 「見ないふりをして見ている」とはどんな時に活かすのか。

- 子どもたちの安全のことや誰かが何かをしようとしている時にさっとおせっかいの手を出すのではなく、さりげなく見守る。
- 普通、見て見ぬふりをするというのは意地悪な印象を受けるので、善意に解釈しようということだと思う。
- 大事なことだと思う。
- 東北の大震災からおせっかい精神の良さというのが、どの町の方にも伝わっていたのだと思う。
- 今回の研究大会は素晴らしい中身になっていたが、それを社会の中で実践したいと考えていたが、癒す・創る・伝える・繋ぐ・支えるそれぞれの言葉を活動の中にひきこんでいくとすべてが生きてくる。社会的な親を育てるところで、我々はそういう親を育てるために具体的にどういう行動をとれば良いのか。
- それは、まさしく社会教育でやらなければいけないことで、それを具体的にどうしていけば良いかを考えるのは、私たちなのではないか。
- 今までは地域社会が確立していて、隣近所に悪いことをした子どもがいれば叱る等、社会的親がいたが、そういう地域の力が無くなってきたのが問題である。今の若い人たちはおせっかいされることが嫌で拒まれる。私たちもおせっかいしたいという気持ちがあるが、それをやって良いのか、悪いのか躊躇してしまう。おせっかいの精神を醸成していくには、おせっかいされて良い、おせっかいして良いといった気持ちは、多くのコミュニケーションを通じ、お互いを信頼しあった中に生じてくるものと思う。昨年の答申でもおせっかいという言葉を使ったが、具体的にどういふことをすべきか出てなかったのが、今後考えていく問題ではないかと思う。
- 社会的親という言葉は生きているのか、通用するのかという質問があった。それは通用できるということをやっていた。
- 意味は分かる。昔は村の威厳を持って色々な指導をしていた長老が社会的親のような存在だと思う。権威を持っていて尊敬もされていた。今のように権威のない人が社会的親をやってはいけない。社会的親を育てると言われても育つものでもない。ただスポーツや学問等を通じてなど、一つの目的があって付いてきてくれる子どもたちの親代わりになるのは可能だと思うが。
- 今の話で印象に残ったのは、「人間の家畜化」というところで、文明が進めば進むほど制度、規則、社会の仕組みなどに慣れてしまっていて自分の頭で考えない。何でも行政に頼るといふ考え方から脱して、自分が改めて周りを見て行動しなければいけない。ファシリテーター養成講座のNPO論で講師が、江戸時代というのは大家と店子の関係がうまく行っていて何でもやっていた。江戸は100万近い人口で役人は何百人しかいなかった。それでも社会の秩序が保てていたと話していた。

(7) その他

配布資料の説明について

5 審議事項

(1) 第5ブロック研修会に事例発表について

以下のとおり。

[意見の趣旨] ■：委員 ➡：事務局

➡ お手元にパワーポイントを印刷したものを用意した。川内校長先生に原稿をつくっていただき、事務局でパワーポイントに起こした。今、配布したものを三鷹市には提出している。本日は、これから説明したところで、みなさんにもご意見をいただきたいと思う。来週11日(火)午後三鷹市で、事前打合せ会に出席し、最終的な資料の詰めをしてくる予定になっている。川内先生からいただいた原稿の一部を抜粋してパワーポイントにしている。発表していただく際は、原稿を基にお話しいただくので、もう少し詳しい内容になっている。当日、発表時間は15分程いただいている。全体でパワーポイント9枚のうち、3枚が府中市の紹介、残りが事例の紹介になっている。

まず始めに、表紙については本宿小学校の外観とロゴマークで、学び返しを前面に押し出して、府中市の代表的な画像を載せている。府中の森、学習センター、市長と澤選手、お神輿、東京競馬場。2枚目は府中市の沿革について説明しているほか、けやき並木、むさしのキスゲ、多摩川の様子を載せている。3枚目は府中市の歴史を簡単に説明していて、国司跡、熊野神社古墳、昔のくらやみ祭の画像も載せている。ここまでが府中市の紹介で、その下に府中市の生涯学習の紹介ということで、学び返しについて説明している。その次からは事例発表ということで、川内先生にお願いしたい。

■ 今回のテーマは「学校と拠点とした地域のつながり」ということで、府中市の場合は「学び返し」が生涯学習の基本的な理念になっているので、その実践事例ということで、このようなパワーポイントを作っていただいた。本校は学校の敷地内にも学級園があるが、他校との大きな違いとして学校の敷地外に200坪くらいの大きな土地を市から借りている。それを農園活動に充てている。大きな特色として、農園における学び返しとして、保護者、地域の方々が係わっていただいている。今回、学び返しという視点から紹介できたらと思っている。

開校42年目で、本宿を卒業した保護者がたくさんいて、そういった意味でも本

校を卒業した親が学び返しとして、本校の自分の子どもたちを育てるために係わっていただいていることを農園を通じて紹介できたらと思っている。色々なことをやっていたいただいていることは5枚目に載せているが、多くの学校で、読み聞かせ、昔の様子を教えてもらったりしているので、本校の特色である農園活動で多くの方に係わっていただいて、あるいは地域の繋がりのある場所にもいくあたりを紹介したい。

- 本宿ならではの話ができるのは良いと思う。
- ➔ 4ページ目の下にある、農園で育てたものをそのまま食べるのではなく、選別作業をして、それを給食センターに出荷して、それをカレーライスとして給食でもらう。こういうことは昔は無かったことなので、すごいと思った。
- 色々な使われ方をしているし、そこで色々な方に係わっていただいていることをお伝えできれば良いと思う。
- この選別は子どもたちがしているのか。
- 子どもたちがしている。大中小に分けている。
- ➔ 選別している写真も載せている。子どもたちがダンボールに絵を描いて、飾りつけをして出荷している。
- じゃがいもはどのくらい作っているのか。200坪全部か。
- 4分の1、5分の1くらいで、他のじゃがいもも混ざっているかもしれないが、給食センターで7校分くらいのカレーを作れるくらい出荷した。ダンボール7、8箱くらい。
- 出荷したということは料金は？
- いただいた。農協を通じて出荷したので、1万300円を食材のお金としていただいた。地域の方々にやっていたところもあるが、これは子どもたちが出荷したということで、子どもたちに還元する。
- 経済の仕組みも学べる。
- 農協を通じて出荷して、1万300円いただいたとのことだが、どのような形で還元するのか。また子どもたちはそれに対してどのような反応があったのか。
- いただいたのが先週だったので、使い道については担任を通して子どもたちに聞いてもらっている。3年生は普段1万円なんて金額を手にしたことが無いと思うので、すごいなーという反応だった。
- 生活科の授業とあるが、どういう授業なのか。
- 昔は、理科と社会をやっていたが、それを併せたようなもの。3年生から理科と社会をやることになるが、1、2年生はそれを併せたような勉強を生活科と称してしている。その中に、朝顔などの植物を育てたり、虫を飼育したりする勉強があり、

本校の場合は、植木鉢にミニトマトなど食用に植物を育てていて、その育て方を教えに来ていただいている。

- このじゃがいもの食材をつかったカレーライスをいただくときに、他校の生徒たちにもこのじゃがいもは本宿小の子どもたちが作ったということを知らせるのか。
- 給食ニュースに載せていただいた。11月の給食センター展のところで、その取り組みを大々的にパネルで掲示していただく。
- ➡ 8枚目の「農園の一角はPTAのコーナーとして…」のところで、「本宿小サポーターズクラブ」とあるが、これをもう少し説明してもいいかと思う。会長さんがブログをしているので、こういった活動の内容を更新しているので、差し支えなければホームページのアドレスを載せてもいいかと思う。
- サポーターズのブログと田んぼ通信がある。農園の状況は田んぼ通信に掲載している。
- ➡ サポーターズのブログ、田んぼ通信、本宿小のブログのアドレス3つを最後のページに掲載する。
- 農園の活動をするときは、体操着や長靴なのか。
- 基本的に汚れてもいいということで、体操着と長靴でやっている。
- 体操着と長靴を着ているアップの写真があるといいと思う。
- 東芝のラグビーの選手とは何をするのか。
- 年1回と少ないが、本宿小祭のときに来ていただいて、直接ラグビーの指導をしていただいている。ラグビー部は年1回だが、テニス部は年3回来ていただき指導していただいている。
- 最後のまとめの一つ目に学校経営方針とあるが、経営より運営の方がいいと思う。
- こういう事業は各学校によって、違うことをしているのか。
- 特色ある教育活動は、特色を出すということで、学校によって随分違うことをしている。
- こういうものが各学校にあるのなら、事例紹介として各学校のものを発表できたら良いと思う。

6 その他

次回審議会開催日程について

11月28日（月）午後2時

府中市生涯学習センター 1階会議室